

アンケート調査から見た短期大学の課題と将来像

堀 江 信 之

1. はじめに

短期大学は学校教育法において、「深く専門の学芸を教授研究し、職業又は实际生活に必要な能力を育成することを主な目的」とした、修業年数が2又は3年の教育機関である。歴史的には1960年代以降、良妻賢母教育を主体とする女子のための大学としての役割を果たしていたが、1960年代以降の高度経済成長期においては、不足する労働者、特に技術系の労働者を短期間で養成する教育機関として、高等専門学校と共に、准専門技術者の養成機関としての役割をはたすようになった。しかしながら、2000年以降の18歳年齢層の減少と、長引く不況による労働者の過剰供給から、教育機関としての社会的意義が失われつつある状況にある。実際、近年の四年制大学および短期大学の入学者は、年々減少しており、特に短期大学での減少が著しい。2011年度の「私立大学・短期大学等入学志願動向」¹⁾によると平成23年度の短期大学338校の内、入学定員充足率が100%未満の短期大学は66.6%におよび、また、22年、23年度共に定員を満たした短期大学は全体の25%に過ぎない。

このような状況の中で、各短期大学は生き残りをかけて、改革に取り組んでいる状況にある。文部科学省の「短期大学教育の改善等の状況に関する調査について（平成22年7月）」²⁾によると、改革の範囲はカリキュラムの改訂から、FDの実施、キャリア教育の実施など多岐にわたるが、例として、カリキュラムの改訂を取り上げると、平成19年から21年度にかけて短期大学の86%が何らかのカリキュラム改革を行なっている。社会情勢などに左右されない、体力のある短期大学としては、1. 教育内容の充実はもとより、2. 入学者を確保するために、高等学校に対して魅力のある内容を整えること、と3. 不況下にあっても高い就職率を確保するための、学生が社会に評価される教育体制を整えること、が重要である。大学および短期大学の就職への取り組みについては、バブル崩壊およびリーマン・ショック以降の長引く不況からくる社会情勢の変化から、大学教育へのキャリア教育への期待が高まり、平成23年より、大学設置基準にいわゆる就業力の育成の項目が追加された。

静岡英和学院大学短期大学は、1966年に設立された、キリスト教精神を教育理念とした短期大学である。静岡地区においては知名度が高いが、他の短期大学の例にもれず慢性的な志願者不足という問題を抱えている。2002年度の改組で現在の現代コミュニケーション学科が創設され、食物学科との2学科の体制を取り現在に至っている。平成22年度に幸いにも、文部科学省の「大学生の就業力育成支援事業」の採択を得て、就業力の育成を目指した学部改革を行なっている。本稿はその事業の一つである、静岡地区の高等学校および企業を対象とした、本短期大学に関するアンケート調

査の分析結果をまとめたものだが、本論に入る前に、就業力育成支援事業予算の設立の経緯や目的などについてまとめてみたい。

2. 文部科学省「大学生の就業力育成支援事業」について

「大学生の就業力育成支援事業」は平成22年度に、国公立大学を通じた大学教育改革の支援の1つとして創設された事業であり、2003年度から、2009年度まで行われた特色GP、現代GPなどの国公立大学共通の競争的予算の流れをくむものである。事業目的としては、「現在の厳しい雇用情勢のもとで、学生の卒業後の就業につながる資質能力向上のため、産業界との連携による課題解決授業などの、学生の卒業後の社会的・職業的自立に向けた優れた取り組みを国として支援する」³⁾ ことにある。採択件数は180件（当初130件の予定であったが、2010年9月10日に閣議決定された「新成長戦略実現に向けた3段階の経済対策」を踏まえ、当初予定を上回る事業が採択された。）であり、内訳は、大学157件、短期大学19件、共同申請4件となっている。期間としては5年間（平成22年度より26年度）の事業であり、予算規模としては、1件について年間あたり2000万円を上限としている。（共同申請の場合は2500万円）。全体の予算額は平成22年度が30億円、平成23年度が29億円である。「就業力」とはこの事業で登場した言葉であるが、その内容は上記に示されるようなものであり、背景には、平成23年度より大学設置基準に付け加わった以下の内容がある。

平成23年度よりの改訂事項

「短期大学は、当該短期大学及び学科又は専攻課程の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、短期大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする。」

この項目は四年制大学の設置基準改定項目にも含まれており、下線部分がほぼ文部科学省の言う「就業力」の定義になっているものと思われる。「大学生の就業力育成支援事業」は、この設置基準に見合った改革を各大学および短期大学に徹底させるための施策と考えることもできる。

3. アンケート調査の目的および方法

3-1. 目的

本短期大学は上記の支援事業に「実践能力向上を重視した就業支援事業」として採択された。事業の詳細は他稿に譲るが、初年度の事業として、静岡地区を対象とした本学のイメージ調査を含むアンケートを企画した。主な目的としては、大学全体の入り口（高等学校）、および出口（企業）の両者から見た大学の現状および大学に対するニーズを把握し、就業力育成支援事業をすすめるにあたっての課題や方向性を見出すことである。

3-2. 対象および方法

アンケートの方法は郵送調査とし、高等学校の対象者としては、静岡県内の高校の進路指導教諭とした。また企業の対象としては、静岡県内で本学からの就職者がいる企業を中心に、分野ごとの層別抽出法により、企業の選択を行った。実施時期は、発送を2011年3月12日（土）とし、締切日を3月14日（月）とした。（当初2月28日を締切日としたが、回収率が悪かったため延長した。）なお、回答の督促を2月18日（金）および3月3日（木）の二回にわたって行った。

3-3. アンケート内容

アンケートの目的と、回収率を考慮し、企業に対しては設問数22（Q1－Q22）、ページ数10、高校に対しては、設問数17（Q1－Q17）、ページ数9のアンケート票を作成した。質問方法は主に記号選択式の評定尺度法および順位法を用いたが、大学のイメージ調査の部分等については、自由記述欄を設けた。アンケート票の内容は紙面の関係で省略するが、以下、興味深い結果の得られた質問項目について分析を行う。

4. 結果

4-1. 対象者

高等学校については143件の発送を行い44件の回答を得た（回収率：30.8%）。また、企業については、820件の発送を行い186件の回答を得た（回収率23.0%）。企業の業種別内訳は表4－1のとおりであった。

	全体	福祉・医療関連	サービス業	卸・小売	メーカー	その他
件数	820	250	267	128	123	52
割（%）	100.0	30.5	32.6	15.6	15.0	6.3

表4－1 アンケート対象企業の内訳

4-2. 高等学校から見た短期大学へのイメージおよびニーズ

まず、高等学校から見た四年制大学および短期大学へのニーズを把握し、特に大学などに入学する際の動機について質問を行った。さらに、四年制大学ではなく短期大学を選ぶ理由についての質問を行った。

4-2-1. 志望校選定にあたっての判断基準

高校生が大学および短期大学を選ぶ場合の傾向について分析するため、順位法による設問を設けた。選択肢として、図4－1に挙げる21の項目を設定した。

4-2-1-1. 大学の選定基準

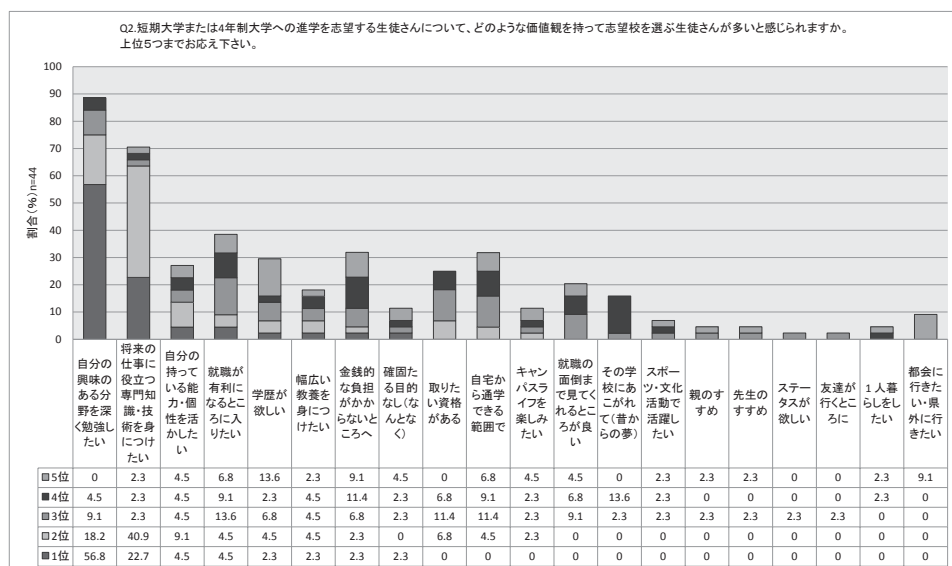


図4－1 大学の選定基準

質問項目の内、以下のものについては0％（選択なし）であった。

- 居心地のよいところが良い

結果を見ると、四年制大学ではまず、専門性を高めることを動機とする、自分の興味のある分野への勉学や、将来の専門知識、自己の能力を伸ばすなどが、大きな比重を占め、ついで、就職、学歴、教養などの理由が続いている。2番目以降にあげられる理由として多いのは、就職、経済面、自宅から通える、などの経済的な理由を主体とするものが目立った。

4-2-1-2. 短期大学の選定基準

同様な質問を短期大学についても行った。結果を図4－2に示す。

質問項目の内、以下のものについては0％（選択なし）であった。

- ステータスが欲しい
- 居心地のよいところが良い
- 1人暮らしをしたい
- 都会に行きたい・県外に行きたい

短期大学への入学に対する志望動機は、四年制大学と大きな違いが見られた。すなわち、1位にあげられる理由に、資格、就職が有利になるところ、経済的理由を含む項目が目立ち、2位以降の項目を含めても、金銭的な負担がかからないところ、あるいは自宅から通学できるなどの項目の比率が高くなっていた。共通して見られる事項として、将来の仕事に役立つ専門的知識・技術を身につけたい、というものが挙がっているが、四年制大学の場合はその背景に、自らの興味のある、ある

いは能力を伸ばしたいという欲求があるのに対し、短期大学の場合は、将来、経済的に有利な職業に就きたいという動機があるものと考えられる。

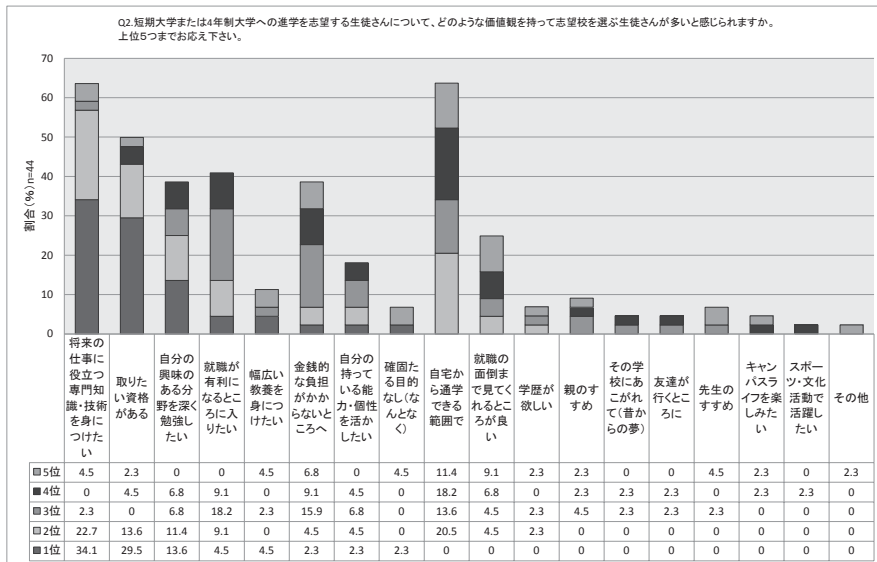


図4-2 短期大学の選定基準

4.2.3. 短期大学を志望する理由

短期大学を選択する場合の理由についてさらに分析するため、図4-3に示した10個の選択肢を設けた。(複数選択可能)

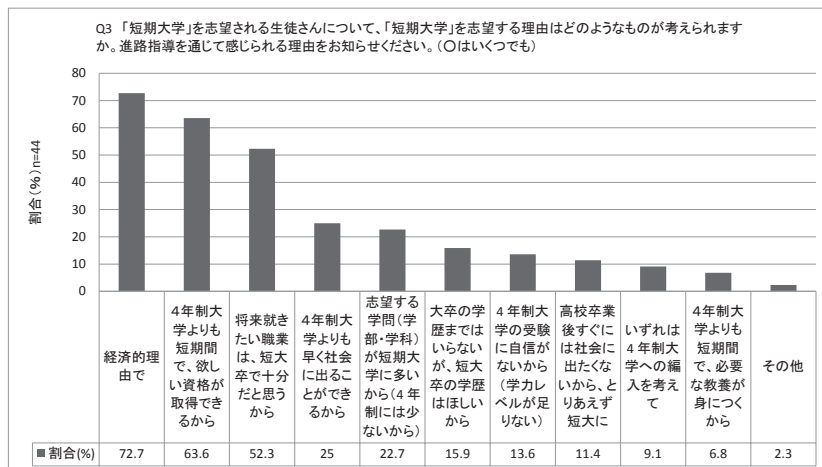


図4-3 短期大学の志望理由

この項目の結果も、前項の短期大学への志望動機の結果分析を裏付ける結果となった。すなわち第1位が経済的理由であり、2位以下も、多くのものが、将来、より有利な職業に、できるだけ早く就きたい、という動機で説明できるものであった。その他の動機として、志望する学問が短期大

学に多い、四年制大学の受験に自信がないなどの理由があった。また、着目すべき点として、短期大学に、就職に必要な専門的知識を求める欲求が大きい反面、教養などについての要求は見られるものの順位が低くなっていた。この点はのちに見る企業からの大学生への期待と異なっている点で興味のある結果と思われる。

4.2.4. 本学への志望理由

志望動機の最後の質問として、本学についての志望動機について質問を行った。質問項目を「Q 4. 短期大学または4年制大学への進路指導を通じて、ここ最近の進路選びや志望校選びの傾向として、お気づきの点や変化している点などがありましたら、お知らせください。」として、自由回答方式で行った。

まず、四年制大学については、第一に「地元で学びたい、自宅から通える」という記述が多かった。また、第二の理由として、学科の内容に関連して、「福祉学、心理学」が学べるというものがあった。「福祉系」を学びたいとする場合は資格取得や就職率の良さが併記される場合が多く、また、心理系については、「その他にも多くの分野が学べるから（普通科）」というものがあった。また三番目の理由として、「就職に有利、資格が取れる」というものがあった。また、資格に関しては、福祉系で多くの資格が取れることおよび教員免許が取れることが評価されていた。

短期大学部については、四年制大学と同様に、第一の理由として「地元で学びたい、自宅から通える」というものが多く、第二として、「食物学科がある、栄養士になりたい」というものが多かった。また、三番目の理由として、「面倒見の良さ」があり、地域での知名度、就職支援までの面倒見の良さなどが評価されていた。また、四番目として「就職に有利」という点が挙げられており、地元での就職率の良さが評価されていた。

全体として、1. 地域での評価が高く、地元で学びたい、自宅から通えること、を四年制大学、短期大学部とも志望動機としてあげる高校が多かった。また、2. 資格などが取れ就職に有利、という利用が共通して見られ、「地元志向」、「就職優先」、という近年の大学志望の傾向を反映する結果となった。また、短期大学については、その他に、3. 面倒見の良さ、が挙げられており、地域での伝統校としての教育の実績が評価されている結果と考えられる。

4.3. 企業から見た短期大学へのイメージおよびニーズ

つぎに、企業側から見た最近の大学生の傾向などについての分析を行った。

4.3-1. 最近3年間の短期大学生および大学生の傾向と不足している能力

この項目では、企業から見た、大学生、短期大学生の優れている点と不足している点を図4-4に示した選択肢により回答していただいた（複数選択可）。四年制大学、短期大学ともほぼ同様の傾向を示しており、多くの項目で、不足していると答える比率が高い項目ほど、四年制大学および短期大学で優れていると評価される割合の差が広がる傾向にあった。（「一般知識・教養」、「企画力・プレゼンテーション能力」、「文章力」、「コミュニケーション能力」、「積極性」など）一方、四年制

大学と短期大学部であり差がなく、ともに優れていると評価された項目としては、「専門知識・技術」、「コンピュータ活用スキル」、「協調性」、などがあり、これらの項目では、不足していると評価される割合も四年制大学、短期大学部で差が見られなかった。さらに、四年制大学、短期大学とも不足しており、優れていると評価される割合にもあまり差が見られない項目として、「ビジネスマナー・常識」があった。前項の、高校から見た場合の四年制大学・短期大学部への志望動機と関連付けてみると、短期大学への志望動機で比率の高かった、専門的職業につくための知識・スキルに関しては、四年制大学、短期大学部もほぼ差がなく企業に評価されている反面、高校から見た場合に軽視されがちな教養などに対する評価が、企業から見た場合は四年制大学・短期大学部とも評価が低く、また、その中の多くのものは、四年制大学と短期大学部で、優れていると評価される割合にも差が見られ、四年制大学のほうが有利となっていることがわかった。これは大学の教育という観点から見ると、短期大学では、四年制大学に匹敵する専門教育を行うという点では、ほぼ目的を達成している反面、基礎的な学力や、教養に対する教育については四年制大学・短期大学部で共に不足しており、特に教育課程の短い短期大学で不足していると評価されていることを示している。

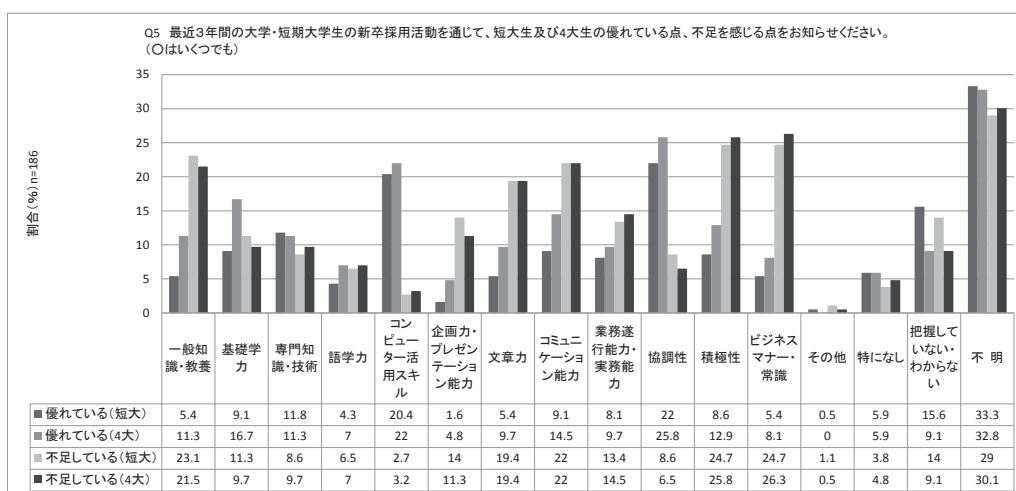


図4-4 短期大学生、4年制大学生の優れているあるいは不足している能力

4.3.2. 最近の大学・短期大学生についての不足している能力

つぎに、自由回答で、大学・短期大学生についての不足している能力および企業が求める人材についての質問を行った。

能力に関する質問項目としては、「Q6. 最近3年間の大学・短期大学生の新卒採用活動を通じて、大学・短期大学生の能力や資質について、不足していると思われる点やお気づきの点をお知らせください。」とした。回答は、4.3-1の結果と重なる部分が多いが、主なものとしては、1. 積極性が足りない、自己アピールが弱い、2. コミュニケーション能力が低い、3. 常識がない、一般教養

の不足、基礎学力の不足、が挙げられていた。

4-3-3. 企業の求める人材（自由回答）

求められる人材に関する質問項目としては、「Q 8. 貴社の求めている人材像や資質、及び資格や専門知識の要件などについて、具体的にお知らせください。」とした。

この質問の回答は、主に次の4つのまとめることができた。

1. 明るく、前向きであること
2. コミュニケーション能力が高いこと
3. 協調性があること
4. 積極的で、自ら行動を起こせること

それぞれの項目について、記述された具体的な内容を挙げると、1. については、「即戦力」、「チャレンジ精神」、「プラス思考」、「明るく元気」、「常に明るく前向き」、などがあつた。2. については、「幅広い年齢層と楽しく知的な会話ができる」、「報告、連絡、相談といった基本的なコミュニケーションが取れる人」、「挨拶など、基本的なことが積極的にできる人」、などがあつた。3. については、「チームワークで職務が遂行できる」、「リーダー的存在になれる」、など、4. については、「ビジネスマナーが備わっている」、「仕事への取り組みを自分で考えて行動できる」、「自分なりの役割を見出し、目標達成のために努力できる」、などがあつた。この部分は経済産業省の定義した「社会人基礎力」の内容である、「前に踏み出す力」（主体性、働きかけ力、実行力、上記の1）、「考え抜く力」（課題発見力、計画力、想像力、上記の4）、「チームで働く力」（発信力、傾聴力柔軟性、状況把握力、起立性、ストレスコントロール力、上記の2、3）とよく対応していた。

この項目の回答も前項の4-3-1とよく対応しており、専門的知識や技能よりも、社会人として一般に求められる力についての記述が多かった。ただし、記述欄には「福祉に対するセンス」などの記載があり、専門的な知識についても評価の対象となっていることも考慮する必要がある。それでは企業としては、コンピュータ活用スキルや専門的な知識について評価しているにもかかわらず、どのような理由で、社会人基礎力に代表されるような、「常識」としての内容を、あえて必要な人材の条件としてあげるのだろうか。

これには3つの要点が考えられる。1つは、実際に最近の学生について、特に「基礎力」として考えられる力が不足していることがあげられる。この原因としては、第1に専門教育を主体とする大学・短大教育の宿命として、「基礎力」に相当する教育が不足する傾向があることがあげられる。2番目としては、長引く不況による、企業としての体力の不足から、新人教育として、最低限の仕事に必要な各分野での専門教育は行えるが、ビジネスマナーに代表されるような社会的常識に関わる新人教育を行えない状況にあることが考えられる。さらに、最後の理由として、以上のように、「基礎力」に相当する部分の教育は、社会的にどこが担うかが明確となっておらず、実際に不足している現状にあるにも関わらず、実際の企業活動においては重要なスキルの一つであり、新入社員が仕事をしてく場合には、それらも含めた、総合的な実践力が問われる現実があるということがあ

げられる。以上のように、企業が「即戦力」としての人材を求める場合、以前には、「すぐに働ける専門的な能力」が問題となり、それらを標的として資格取得や技術教育を大学に求めたが、現在では、それを補完すべき「社会的常識力、基礎力」が不足するに至った、というのが現状ではないかと考えられる。

4-3-4. 栄養士・調理員に求める資質について（栄養士の採用実績のある企業）

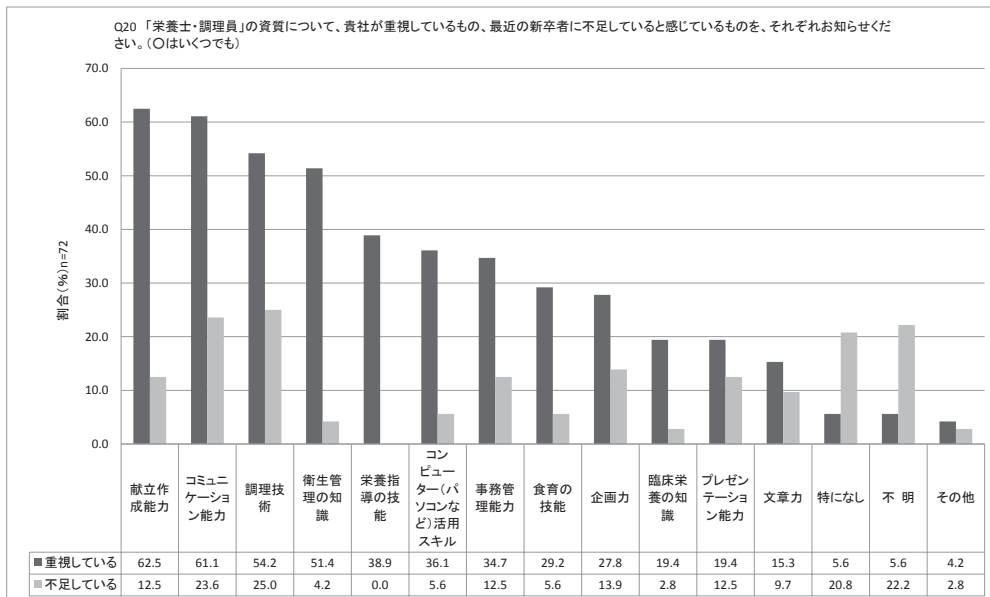


図4-5 栄養士・調理員に求められるあるいは不足している資質

前項までの質問で、一般の大学および短期大学に対する企業の要望について調査したが、本学の短期大学部に所属する食物学科について、さらに求められる資質などについて調査を行った。食物学科は栄養士の養成施設であり、栄養士（国家資格）は、として短期大学で得られる資格としては、かなり専門性の高い資格の一つである。まず、栄養士の採用実践記のある企業に対し、栄養士に求められる資質について、重視している資質と、その資質が最近の（栄養士としての）新卒者に不足していると感じているかを質問した（図4-5）。結果を見ると、最も求められる資質として、「献立作成能力」、「コミュニケーション能力」、「調理技術」が挙げられ、かつ、「コミュニケーション能力」と「調理技術」については、不足しているとの答えの比率が高かった。前項では、専門的知識・技能に比較して、「コミュニケーション能力」や「企画力」、プレゼンテーション能力、「文章力」など、一般的な常識力に属する者の比率が高かったが、栄養士という専門的な分野に限って質問すると、求められる資質として、栄養士特有の専門的知識・技能についての要求も同様に求めている実態が示された。

4-3-5. 栄養士に加えて、欲しい資格

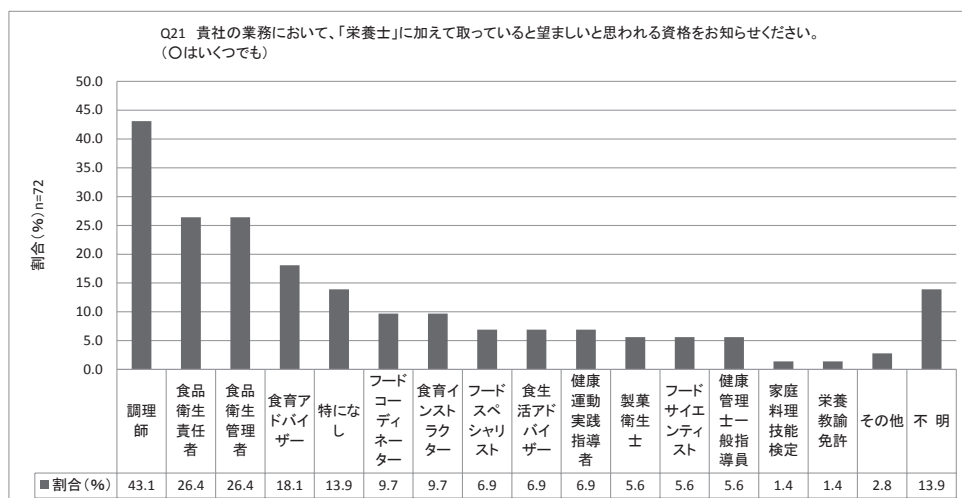


図4-6 栄養士に加えて取得が望まれる資格

つぎに、栄養士に加えて、望ましいと感じている資格について質問を行った。結果を図4-6に示す。これは、栄養士の資格に加えて、身につけて欲しい専門的知識・技能として望ましいものは何かを具体的な資格として示すものであると考えられる。結果を見ると、前項で、必要であり、かつ不足している能力としてあげられていた調理技術と関連の深い、「調理師」がまず挙げられており、ついで、食品衛生に関連した資格、食育に関連した資格と続き、前項の栄養士に要求される資質のうちで、要求度の高かった「衛生管理の知識」、「食育の技能」などと、よく対応していた。

栄養士は食事の献立作成や、栄養計算に加え、栄養指導や食育など、コミュニケーション能力や文章力などを含む総合的な能力が要求される資格ではあるが、栄養士を採用している企業にとっては、栄養士としての専門的知識も、あわせて要求していることを示していると考えられる。

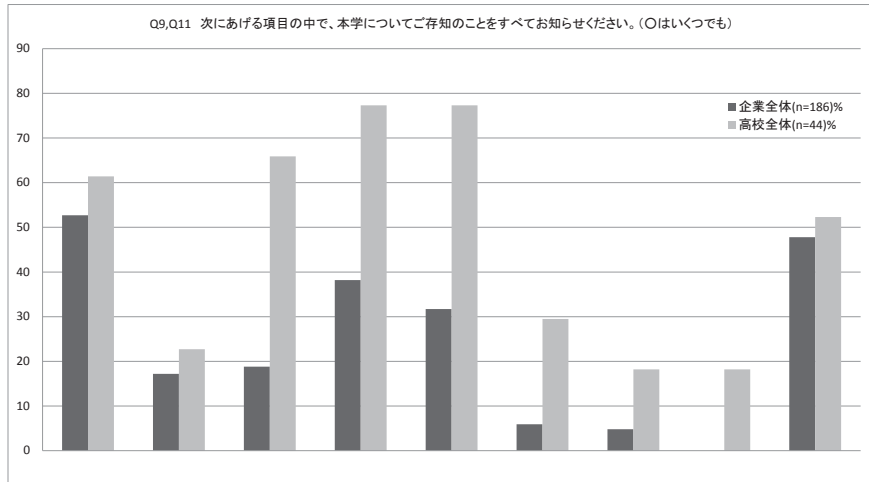
4-4. 高等学校および企業から見た当短期大学のイメージ

前項までは、大学および短期大学につて、現在の企業の要求の傾向を探る目的で、一般的な傾向と、専門職に対する傾向の分析をおこなった。次に高等学校および企業から見た、本短期大学のイメージについて調査を行なった。アンケートでは、以下に述べる短期大学に加え、4年制大学についての質問も行なったが、ここでは短期大学部に焦点を絞り、企業および高校から見た姿について分析を行なった。

4-4-1. 本学の認知度

まず、本学短期大学部について、以下の9つの選択項目を設定し、企業および高校における認知度を調べた（図4-7）。

アンケート調査から見た短期大学の課題と将来像



	伝統校であること	2011年4月より男女共学になること	現代コミュニケーション学科があること	食物学科があること	食物学科で「栄養士資格」が取得できること	食物学科で「フードスペシャリスト」が取得できること	食物学科で「フードサイエンティスト」が取得できること	就職状況が良いこと	キリスト教精神に基づく人間教育(「愛と奉仕」)を実践していること
企業									
調査全体(186)	52.7	17.2	18.8	38.2	31.7	5.9	4.8		47.8
本学短期大学部からの採用実績あり(34)	52.9	26.5	29.4	61.8	47.1	17.6	17.6		
本学4年制からの採用実績あり(66)	51.5	22.7	24.2	34.8	33.3	9.1	9.1		
どちらも実績なし・わからない(101)	55.4	14.9	14.9	36.6	28.7	3	1		
高校									
調査全体(44)	61.4	22.7	65.9	77.3	77.3	29.5	18.2	18.2	52.3
本学短期大学部への進学実績あり(34)	64.7	23.5	73.5	91.2	88.2	38.2	23.5	17.6	
本学4年制への進学実績あり(38)	68.4	23.7	65.8	84.2	84.2	34.2	21.1	18.4	
どちらも実績なし・わからない(2)	50	0	0	0	0	0	0	0	

図 4-7 静岡英和学院大学短期大学部の認知度

企業および高等学校の結果を比較した場合、認知度の高い「伝統校である」「キリスト教精神に基づく人間教育」および比較的認知度の低い「2011年度よりの男女共学」を除くと、企業、高校間で認知度に大きな違いがあり、高校での各項目の認知度に比べ企業の認知度は低かった。特に学科についての認知度は、高校では、ともに6割から8割程度にあるのに対し、企業に対する認知度は、歴史の長い食物学科の場合でも全体で4割程度であった。

この原因としてまず考えられるのは、これまでの本短期大学の教育内容の広報が、主に入学者を集めるための高等学校への広報を中心に行われてきたことである。もう1つの理由としては、歴史のある短期大学として、地域に多くの人材を供給しているにもかかわらず、就職活動そのものは、短期大学が主体と言うよりも、大学に寄せられる求人票や、学生の活動を主体に行われてきたことが挙げられる。この傾向は、四年制大学、短期大学を問わず一般の大学に見られる傾向であり、企業に対して、大学が主体となって、教育内容を広報するようになったのは、近年の産学連携や、最初に挙げた公的機関による社会人基礎力、就業力の育成事業など、産業界が積極的に大学に対して必要な人材の資質を要請するようになってきてからのことである。

以上のことを踏まえると、栄養士養成機関として歴史のある本学食物学科においても、企業側としては、栄養士としての人材を必要としない限り、学科名や栄養士の養成機関であることについて、あまり認識がないことも、ある程度納得が行く。

何れにしても、この結果から、企業を中心とした社会から見た本学の内容については、「伝統校である」「キリスト教精神に基づく大学である」ことを除くと、認知度はかなり低く、特に学科名やおよび教育内容については、さらなる広報が必要であることがわかる。

4.4.2. 自由回答欄からのイメージマップ（短期大学部）

本学に対する、外部から見たイメージをさらに明確にするため、本学に対して思いつく事柄、良いイメージ、悪いイメージを自由に記述してもらい、その中に見られる単語の出現頻度と相関性から、イメージマップを作成した。短期大学から得られたものを図4-8に示す。あくまで、ことばのつながりからの相関図にすぎないので、解釈にはやや任意性が伴うが、およそ次のように読み取ることができる。

まず、中心にそって、「地元」、「優秀」、「多い」、「輩出」などのことばが続き、短期大学の特性として、地元で多くの人材を供給していることに関連した記述が多く見られる。さらにその右側の上部には、「真面目」、「爽やか」、「おとなしい」、などの言葉のほか、「あかるい」、「積極性」、「かける」などのことばが同時に使われる傾向があり、この部分は学生の特性を反映していると考えられる。一方、左側には、「食物」、「短大」、「キリスト教精神」、「勉強」などのことばが集まり、主に栄養士養成施設である食物学科を含むイメージが集まっている。食物学科は四年制大学も含めた本学唯一の科学系（理系）の学科であり、キリスト教とはあまり結びつかない印象があるが、「女子」、「勤勉さ（勉強）」、食べ物から来る「美味しいもの」、「幸福」と言ったイメージから、本学の設立理念であるキリスト教精神との結びつきが出てくることが考えられる。

最後に、下部には「お嬢さん」、「キリスト教」、「伝統」などのことばが集まり、伝統あるキリスト教主義の女子校（女子短大）というイメージが集まっている。本学の属する静岡女学院は、静岡での女子教育のための教育機関として、最初に設立された静岡女学校を母体としており、その伝統が今でも伝わっていることを示していると考えられる。

4.4.3. 他大学との比較

高等学校、企業から見た本学のイメージについての分析の最後の項目として、より明確に本学の特質を調査する目的で、静岡県下の他の短期大学との、専門教育に関する事項を含む特性の比較を行った。方法としては、図4-9に見られる26項目について、静岡県内の本学を含む4校の短期大学で当てはまるものを選んでもらい、集計を行った。

図4-9のグラフでは、企業に対する答えの比率をそれぞれの項目の左半分のグラフで、高校に対する答えの比率を右半分のグラフで示した。また、グラフの下部に示した集計表に、他の3つの短期大学に対して高い数値を示した項目を四角で囲んで示した。結果を見ると、前の2項と共通して、「伝統がある」、「知名度がある」、「礼儀正しい学生が多い」、「キャンパスがきれい」、など、キリスト教精神に基づく伝統校としての特性が、本学の特徴としてあげられていることがわかる。また、「地域社会に貢献している」の項目で数値が高いが、これはキリスト教精神に関連して、ボランティア活動などが盛んであることが評価されていると考えられる。その一方で、「活気がある」、「行き届いた指導をしている」、「広報活動に力を入れている」、「就職率が高い」などについては、他校に対してやや低い値となっている。企業および高校の別で見ると、「よく知らない」の項目が企業で高い値を示し、「伝統を重んじている」「すぐに役立つ実学資格が身につく」「地域社会に貢献している」の項目では、高校で高い値を示していた。

この質問は、静岡英和学院大学（四年制大学）についても行っており、静岡英和学院大学を含む静岡県内6校の大学について、同じ項目を設定し、企業および高等学校から、回答を得た。その結果をまとめたのが図4-10である。このグラフでは、四年制大学および短期大学の回答の平均値と、本学の短期大学および四年制大学の結果を示した。前のグラフと同様に、企業の回答をそれぞれの項目の左半分のグラフで、高校の回答の比率を右半分のグラフで示した。また、高い値を示した項目および平均に比べて概ね2倍以上の値を示した本学の項目を四角で囲んで示した。結果を見ると、前のグラフと同様に、「好感が持てる」「知名度がある」「好感が持てる」「キャンパスがきれい」「礼儀正しい学生が多い」の項目が短期大学部、四年制大学とも高く、地域での伝統校としてのイメージが、短期大学部、四年制大学とも定着していることを示している。また、高校からの評価として、「すぐに役立つ実学・資格が身につく」が短期大学部、四年制大学とも、平均に比べて高い値を示しており、上記のイメージに加えて、高等学校から見た「実学・資格」に関する評価が高いことを示している。

Q.本学について、どのようなイメージをお持ちですか。思いつくことや、良いイメージ、悪いイメージ、学生の印象などどのようなことでも結構ですので自由にお書きください。

「静岡英和学院大学短期大学部」について

- 女学院のイメージが強いです。
- 教養ある女性の教育に取り組んできたイメージ。
- 女子が多数、ほとんどを占めている。
- のんびりしているイメージ。
- 清楚かつ活発な女性が多くいる学校。きれいな建物。

- 優秀な女性が多いイメージ。
- 全般的に優秀な学生が多い。
- 伝統があり、非常に優秀な学生を輩出している。
- 優秀な学生が多く学んでいると感じています。

- さわやか、まじめ。
- まじめな学生が多いイメージ（礼拝などがあるため）です。
- ボランティア活動を頑張っている。まじめな生徒が多い。

※マッピングではキーワード同士が線で引き合うように動きます。キーワード同士が近い場所にあるのは、同じ文意の中に使用されているということです。また、この矢が太いということは同時に使用されている回数が多いということです。

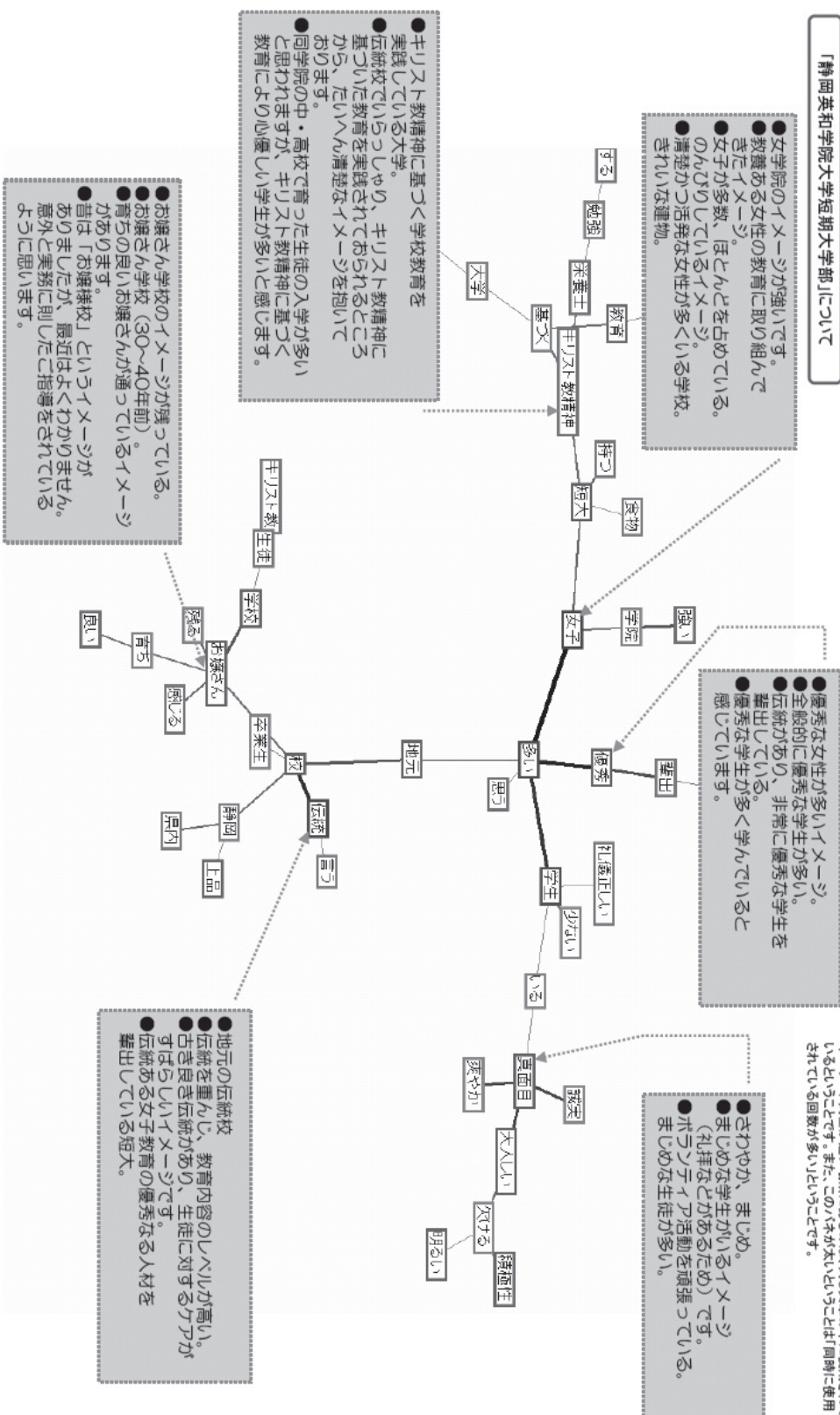


図4-8 静岡英和学院大学短期大学部の自由回答欄から得られたイメージマップ

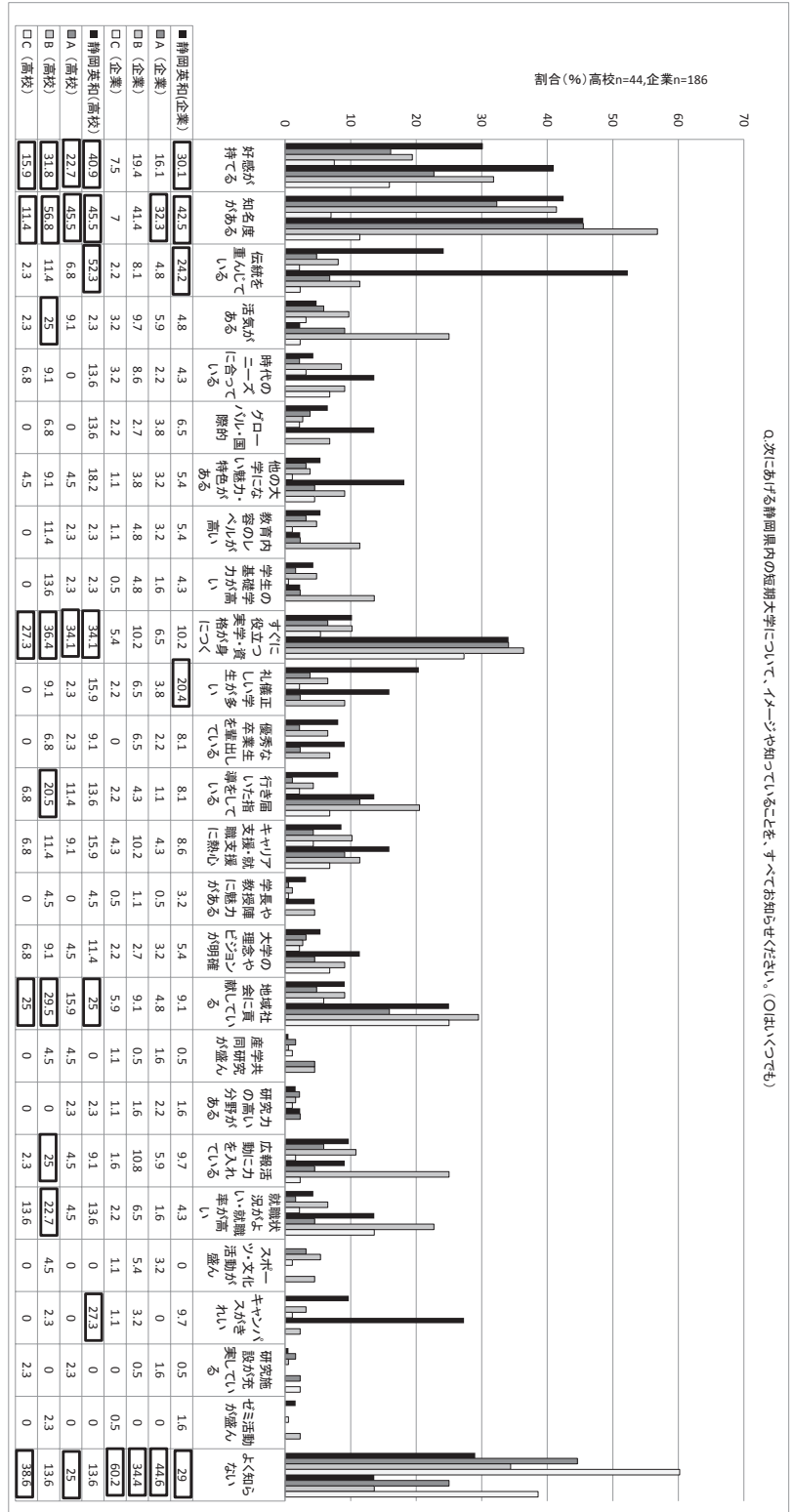


図 4-9 静岡県内の短期大学の比較

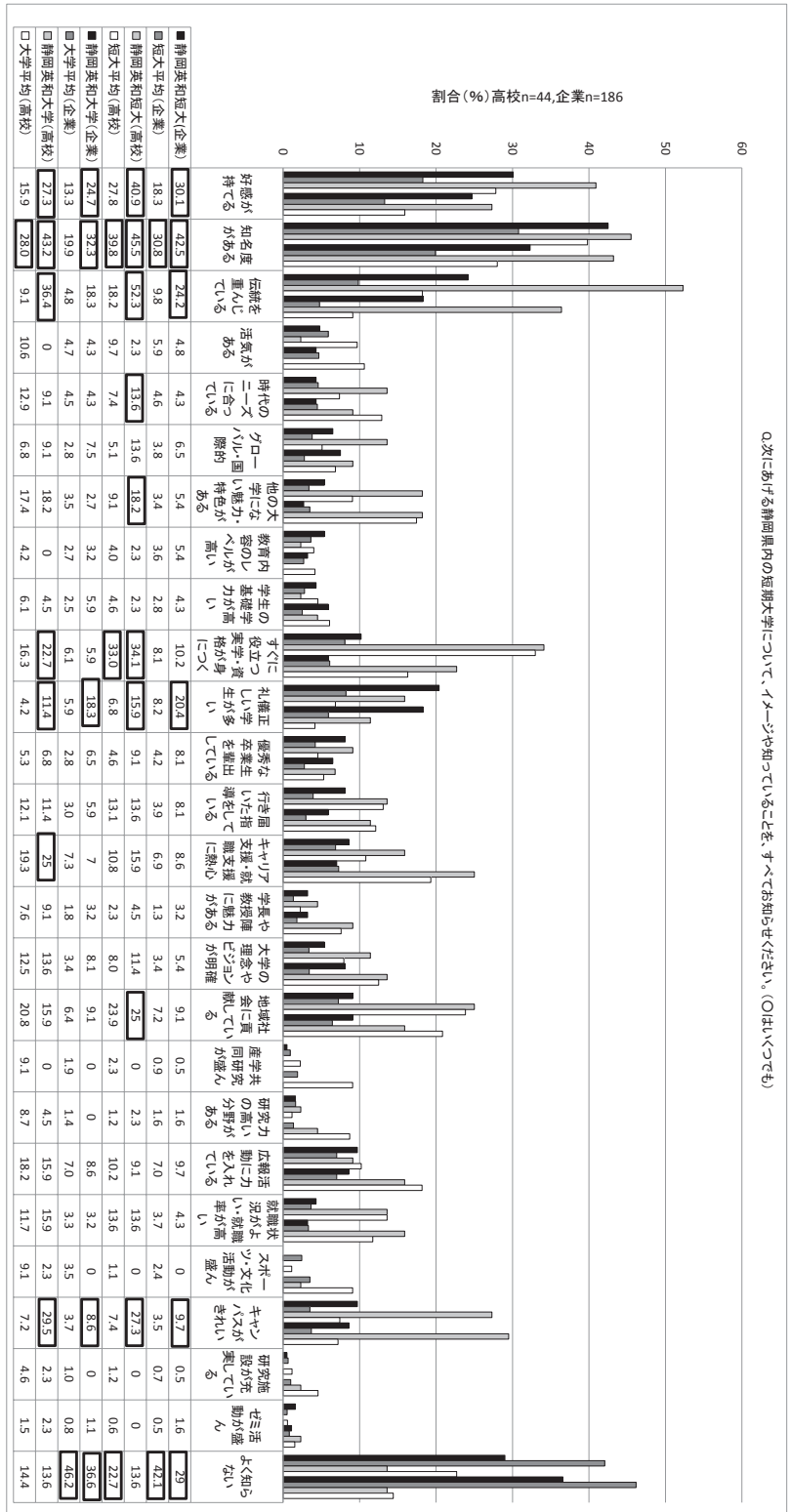


図4-10 静岡県内の大学および短期大学の比較

5. 考察

5-1. 高等学校および企業から見た大学・短期大学のイメージの違いについて

最初に述べたように、このアンケートの目的は、入口（高等学校）および出口（企業）における本学の認知度、イメージを調査し、検討を加えることであった。その結果、両方向から見た場合の共通するイメージや、期待される特質の違いなどを知ることができた。両者から見た違いについては、高等学校からの短期大学部への入学動機が経済的理由に加え、より専門的な職業につくための知識・技能を短期間で身につけられることが理由としてあげられている一方、企業から見た場合は、短期大学、四年制大学とも、「コミュニケーション能力」や「常識力」の項目が、期待される項目として挙がっていた。また、認知度について見ても、高校側から見た場合は、学科や設置しているコースの認知度はある程度高くなっているのに対し、企業については、「伝統がある」などの全体的な印象に関する項目に比べ、非常に低い値となっていた。

この原因としては、結果の高で述べたように、一つには、教育内容に関する広報が、高校に対する広報活動に比べ、企業に対する広報活動で欠けている面が考えられる。しかし、さらに大きな原因として、そもそも、高校側と企業側で、教育機関としての大学を見る視点が大きく異なっていることがあげられる。

つまり、高校が入学する対象として、大学・短期大学を選ぶ場合は、どのような教育が受けられるかが第一の観点となり、学科による教育内容の違いや、コースにより取得できる資格の違いが興味を中心となる。しかし、企業側から教育機関を見た場合は、あくまで人材の提供先との視点から、どのような技能・資格を持った学生が、その大学・短大から就職するか、が問題であり、どのような学科出身か、どのような教育コースを受けているかは二次的な問題として捉えられているのではないだろうか。

アンケートの結果を見ても、企業側からは、大学・短期大学の学生に対して、「コミュニケーション能力」「常識力」と言った項目が、必要度が高く、欠けている資質として上位に来ている一方、学科やコースの存在の知名度は低く、一見、専門職に対する知識には関心が薄れているように見える。しかし、栄養士などの資格に結びついた資質・技能を質問した場合には、その専門職に対応した技能（この調査では、「調理」「食育」「食品衛生」などに関した知識など）が項目として要求されている。これは、一般に、大学生、短大生と言った層に対しては、第一に「常識力」などの項目を期待するが、次に要求する項目として出身学科、コースなどへの関心よりは、結果として取れる資格に付随した技能を重視していることを示していると考えられる。

最初に、短期大学全般に必要な改革の要点として、1. 教育内容の充実、2. 入学者を確保するために、高等学校に対して魅力のある内容を整えること、3. 不況下にあっても高い就職率を確保するための、学生が社会に評価される教育体制を整えること、を挙げた。上記の内容に照らして考えてみると、高校に対する、魅力的な教育プログラムの設定はもちろんだが、企業に対して、教育プログラムの広報とあわせて、実際にその内容を十分に習得している人材の供給が、何よりも重要

であることが示されたといえる。それに加え、教育プログラムなどを企業へ広報する場合には、その教育効果を示す、資格の取得率などの資料を積極的に公開していくことが必要と考えられる。

5-2. 静岡英和学院大学の伝統について

アンケートの結果として、高校から見た場合および企業から見た場合に共通して評価された項目として、「好感が持てる」「知名度がある」「好感が持てる」「キャンパスがきれい」「礼儀正しい学生が多い」などの項目が挙げられた。本学は静岡地区において、伝統のある女子教育の教育機関としての歴史を持っており、そのことが評価された結果と考えられる。図4-8に示した短期大学部のイメージマップにもこのことは現れており、キリスト教精神に基づく、清楚で勤勉なイメージが現れている一方で、積極性にかけるなどのマイナスのイメージも挙がっている。

興味深いのは、キリスト教精神、勉強と並んで栄養士といった、食物学科のイメージが重なっていることで、その点では、短期大学部の食物学科は、栄養士の養成施設として、清楚、女子、勤勉というイメージとうまく重なった広報が行われていることが考えられる。その一方で、食物学科で新たに設定した、フードスペシャリストやフードサイエンティストは知名度が低いため、このマップには現れてこず、また、現代コミュニケーション学科の内容についてもこのような調査に現れてこない点が、問題点とあげられる。

短期大学部では、2011年度の入学生より男女共学の短期大学となり、女子教育にとらわれない新しい方向に進みつつあるが、今回の調査で、企業および高校から見た場合に高い評価を得た「伝統のある」「知名度がある」「真面目」「礼儀正しい」などの特性は、本学の強みとして、今後も、学科の教育内容とあわせて、広報に取り入れていく必要がある。

6. 静岡英和学院大学短期大学部の将来像について（まとめ）

近年、学生の「常識力」の不足が多く言われており、企業を対象とした多くの調査で、最近の大学生の一般的な学力や、コミュニケーション能力の不足が話題となっている。今回の調査でもその傾向は見られるが、静岡県下の高等学校および企業を対象としたことで、より本学が目指すべき方向をあきらかにすることができた。

18歳年齢層の減少と長引く不況の影響により、短期大学はその存在意義が問われており、新しい社会的機能を模索していることは最初に述べたとおりである。特に話題となるのは、専門学校など、教育年数が近い教育機関との差別化や、米国のコミュニティカレッジなどをモデルとする、キャリア教育の最初の段階としての教育機関を目指すなどの、新しい概念に基づいた改革である。しかしながら、日本の短期大学の現状を見ると、状況への対処に精一杯で、効果のある改革がなされている例は極めて少ないように見える。

今回のアンケートで見られた改革のキーワードとしては、「経済性」「直接就職に結びつく資格・実学」「地元志向」「地域貢献」、「キリスト教精神を基礎とする伝統を生かした教育」などが挙げら

れる。これらは、現在行われている大学生の就業力育成支援事業や地域連携と合致しているが、短期大学部の学館の連携や四年制大学との連携により、より魅力的なコースの創設や、優秀な卒業生の輩出に結びつけることが必要である。

7. 謝辞

アンケートの作成、実施に当たりましては、入試広報課およびキャリア支援課の方々、入試広報委員、就職委員の皆様をはじめとする学内の方の多くの協力を得ました。特に本学入試広報課 課長 土屋尚志氏、キャリア支援課 課長 奥村豊氏には多くの示唆と協力を得ました。さらに、本学短期大学部の教育内容、短期大学に関する現状分析などに関しては、食物学科の入試広報委員、木下ゆり氏、五島泰子氏（短大部就職委員長）、および現代コミュニケーション学科の入試委員である、児玉和人氏らとの議論で多くのアイデア又は示唆をいただきました。この場を借りて感謝いたします。

本事業は文部科学省「大学生の就業力育成支援事業」の補助を受けて行われました。この場を借りて感謝いたします。

8. 参考文献

1. 日本私立学校振興・共済事業団 私学経営情報センター、「平成23(2011)年度 私立大学・短期大学等 入学志願動向」、平成23年7月
2. 文部科学省「短期大学教育の改善等の状況に関する調査について」、平成22年7月20日
(http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/tandai/_icsFiles/afieldfile/2011/10/03/1222308_01.pdf)
3. 小栗孝明（文部科学省）「大学生の就業力育成支援事業について」資料、就業力育成支援事業中部地区会議、平成23年7月19日